

## もくじ

▽大会終了報告	1-2
▽大会のお知らせ	2-3
▽学会各賞受賞者のことば	3-7
▽from Editors	7

### 【大会終了報告】

日本生理人類学会第 68 回大会 大会長 藤原勝夫  
(金沢大学医薬保健研究域医学系運動生体管理学)

2013 年 6 月 8 日(土)と 9 日(日)の両日に、金沢大学宝町キャンパスにおいて日本生理人類学会第 68 回大会を開催いたしました。北陸では初めての開催であり、重責を感じました。一般講演は 77 題(口頭発表 42 題、ポスター発表 35 題)という多くのお申込みをいただきました。ポスター発表の会場は、多くの方に参加していただけるよう口頭発表会場内と懇親会会場横に設けました。すべての発表に対して休憩時間を惜しんで質疑・応答を行うほどの充実したものとなり、大会関係者一同安堵いたしました。

この大会では、高橋正紘先生(めまいメニエール病センター長)による公開特別講演を設け、「脊椎動物の平衡制御、原理と盲点」と題してお話をいただきました。高橋先生の御専門である“めまい”について、進化上の起源などを視座にすえた興味あるお話を伺うことができました。高橋先生が継続された研究の奥深さについては、多くの方が感銘を受けたものと思います。

また、人類学関連学会協議会・合同シンポジウムとして「人間の姿勢とロコモーション様式の特徴」を開催しました。日本霊長類学会、日本文化人類学会、日本人類学会、日本民俗学会、日本生理人類学会から推薦されたシンポジストの先生方に、一側優位性などについて、身体と文化の両

面から論じていただきました。演者の方々にはテーマの趣旨を理解していただき、活発な討論ができました。多くの研究者にとって、研究の視点を広げることができる有意義なものになったと確信しております。



人類学関連学会協議会・合同シンポジウム  
「人間の姿勢とロコモーション様式の特徴」

さらに、学会会員を対象にシンポジストを公募し、「脳の活性化」と題するシンポジウムを設けました。このシンポジウムでは、若手研究者 4 名に登壇していただき、頸部前屈姿勢の保持による脳賦活作用、他者行為の観察時に生じる脳のミラーシステム、注意分散による脳の活性化と姿勢制御、高齢者における頸部前屈姿勢でのアンチサッケード訓練による前頭葉機能の改善について、最新の研究成果を紹介いただきました。



公募シンポジウム「脳の活性化」



左:ポスター会場 右:口演会場

懇親会では、金沢の地酒や特産品をご用意いたしました。殆どの方にご参加いただき、研究談義を楽しむことができました。



懇親会の様子

本大会の運営にあたっては、全国で活躍する研究室関係者に多大なご協力をいただきました。また、学会本部の先生にもお世話になりました。大会長として皆様に御礼申し上げます。

#### 【大会のお知らせ】

第 69 回大会（京都）のご案内  
福岡義之（同志社大学）

第 69 回大会を、下記の会期・会場にて開催します。多くの皆様のご参加を心よりお待ちしております。

おります。

本大会では例年通り特別講演、一般公演、ポスターセッション、シンポジウムを企画いたしました。京阪奈研究学研都市の地の利をいかした企画としまして、奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科准教授・柴田智広先生に「適応的なロボットによるヒトの運動学習や生活機能の支援」と題して、ヒトの運動学習を適応的に支援するロボットと、着衣介助を代表とする介助を適応的に行うロボットの話をご講演いただきます。また、シンポジウムを2つ企画しております。詳細につきましては、今後学会ホームページで随時お知らせいたします。たくさんの会員の皆様と同志社大学京田辺キャンパスでお目にかかれることを心より楽しみにしています。奮ってご参加くださいますようお願い申し上げます。

1) 会期 2013年10月26日(土)、27日(日)

2) 会場 同志社大学京田辺キャンパス恵道館

〒610-0394 京田辺市多々羅都谷 1-3

(JR 同志社前駅より徒歩 10 分、近鉄興戸駅(普通停車)より徒歩 15 分、JR 田辺駅ならびに近鉄新田辺駅(急行停車)よりバスで 15 分)

\*地図等は学会ホームページでご確認ください。

3) プログラム概要(予定)

・理事会・若手の会(10/25)

・一般口演(10/26, 27)

・ポスターセッション(10/26, 27)

※ポスター発表については A0(1189mm×841mm)縦長のサイズでパネルをアレンジしています。

・評議員会(10/26)

・懇親会(10/26)

・総会(10/27)

○関連会議(10/27)

特別講演 10月26日(土)

演題「適応的なロボットによるヒトの運動学習や生活機能の支援」

奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科

柴田 智広 先生

座長 工藤 奨先生(九州大学工学研究院)

■ シンポジウム I 10月26日(土)

テーマ 「ヒトの随意運動制御メカニズムの解明」

司会 青木 朋子先生(熊本県立大学)

シンポジスト(敬称略)

青木 朋子(熊本県立大学)

荒牧 勇(中京大学)

樋口 貴広 (首都大学東京)

藤井 進也 (トロント大学)

■ シンポジウム I I 10月27日 (日)

テーマ「神経・筋の可塑性とリハビリテーション・スポーツ」

司会 中澤 公孝先生 (東京大学)

シンポジスト (敬称略)

中澤 公孝 (東京大学)

牛山 潤一 (慶応大学)

小川 哲也 (早稲田大学)

伊藤 尚基 (国立精神・神経医療研究センター)

4) 参加・発表申し込み等の日程・方法

・演題締め切り 2013年8月26日 (月)

・抄録提出締め切り 2013年9月27日 (金)

\*参加申込, 発表申込の詳細 (申込フォームなどの書式) を学会ホームページに掲載いたしますので, ご確認をお願いします。

5) 大会参加費・懇親会費

■大会参加費

・9月27日 (金) までの振込

正会員 7000円, 非会員 9000円

学生 (会員) 3000円, 学生 (非会員) 4000円

・9月28日 (土) 以後の振込

正会員 8000円, 非会員 10000円

学生 (会員) 4000円, 学生 (非会員) 5000円

■懇親会費

正会員 3000円, 非会員 4000円

学生 (会員/非会員) 1000円

■振込先

郵便振替口座

加入番号 00960-3-202148

加入者名 日本生理人類学会第69回大会事務局  
銀行口座から振込の場合:

ゆうちょ銀行 ○九九店 (ゼロキュウキュウ店)

預金種目: 当座 口座番号: 0202148

口座名義 ニホンセイリジンルイガツカイダイ

69カイトイカイジムキョク

6) 大会事務局

〒610-0394 京都府京田辺市多々羅都谷1-3

同志社大学大学院スポーツ健康科学研究科運動  
栄養学研究室内

e-mail: in69jspa@mail.doshisha.ac.jp

Tel 0774-65-7535

Fax 0774-65-6029

## 【学会各賞受賞者のことば】

平成24年度日本生理人類学会賞を受賞して

曾根良昭 (美作大学)

この度、栄えある日本生理人類学会・学会賞を頂き大変恐縮しております。

私は平成7年本学会に入会するまでは、主に糖質、特に少糖類・多糖類の化学構造とその生理活性との関連を探る研究を行っており、人を対象とした生理人類学とは縁遠い学問分野からの入会でした。入会の動機は私が所属する食品学・栄養学の分野で、これまでとは違った観点から食品・栄養学を研究してみたいというものでしたが、本当に何も知らない一からの出発でした。私にとって幸いだったのは本学会で多くの先生方のご指導、ご協力を得ることができたことで、なんとかここまで生理人類学分野での活動を続けることができました。特に、私をこの分野に誘ってくださり、私の初めての生理人類学での研究論文を指導してくださった現九州大学教授の綿貫茂喜先生、私にとって初めてのフィールドワークであるタイ国での調査への参加を紹介してくださった現千葉大学教授の宮崎良文先生、長い間共同研究をしていただき、研究結果の解析、論文の書き方など指導してくださった奈良女子大学名誉教授・故登倉尋實先生と出会うことがなければこの度の受賞はなかったものと思われま。この文面をお借りして深くお礼申しあげます。

さて私事になりますが、私は平成25年3月に30年余り在職した大阪市立大学を辞し、現在、岡山県津山市にある美作大学に特任教授として奉職しております。この以前とは違った教育・研究環境でこれまで理解・勉強不足だったところを補いながら“じっくりと”、“落ち着いて”ここまでの研究を顧みて入会の初心にあった“これまでとは違った観点からの食品・栄養科学”を提案していきたいと考えております。このことにより幾許かの生理人類学会への学問的貢献を為すことができれば今回の受賞に対する学会員の皆様へのお礼を果たすことになるのでは、と考えております。

最後に生理人類学会のますますの発展を祈念してこの文章を終わりたいと思います。本当にありがとうございました。



### 学会各賞受賞者

左から優秀論文賞（英文誌）・石橋圭太氏, 奨励賞（英文誌）・西村貴孝氏, 日本生理人類学会賞・曽根良昭氏, 勝浦哲夫学会々長, 奨励賞（英文誌）・Titus Wijayanto 氏, 奨励賞（和文誌）・崔多美氏

### Winning the grand prize award of 2012 JPA

Douglas E. Crews (Ohio State University)

Colleagues and friends thank you for nominating our paper, “Allostatic load among elderly Japanese living on Hizen-Oshima Island”, for the 2012 Grand Prize Award for publishing a paper in the Journal of Physiological Anthropology. Special thanks to Dr. Kusano, Chairman of the Selection Committee, and to the selection committee for voting to award our paper this honor. Special thanks to my co-workers and co-authors Dr. Yoshiaki Sone, Dr. K. Aoyagi, Dr. T. Maeda, Ms. A. Alfarano, and Dr. Y Kusano. Without their support and hard work, data examined in this paper would not have been available for analysis and publication.

It is particularly rewarding to be the first authors to receive this award in the past decade. We all are most appreciative that we were chosen from among the many high quality and well designed papers that were published in JPA this past year. I apologize for not being able to attend this award ceremony in person and thank Dr. Ishibashi for accepting this award on behalf of the study’s authors. We look forward to receiving the award plaque and certificate and will display it in my office at The Ohio State University. Again thank you very much for this distinction.

### 優秀論文賞（英文誌）受賞のご挨拶

石橋圭太（千葉大学大学院工学研究科）

このたびは名誉ある優秀論文賞を賜り大変光栄に存じます。賞をいただいた論文は、ヒトに特有な直立姿勢を支える起立性循環調節の実体に、正弦波下半身陰圧という実験的手法を用いてアプローチした研究です。あまり一般的ではない手法を用いるため、装置の制作から始めなくてはならず、成果が得られるまで4年ほどかかった仕事でした。

一般的な定常負荷による下半身陰圧ではなく、正弦波パターンの負荷を導入した背景は卒業研究に遡ります。指導教官の安河内朗先生（当時九州芸術工科大学、現九州大学）から心拍変動性（HRV）の測定法という研究テーマをいただきました。心拍変動性については当時助手の小林宏光先生（現石川県立看護大学）が第一人者でしたので、小林先生からは測定装置や解析方法など沢山のことを教わりました。呼吸コントロールに正弦波パターンを用いて正確なHRVを測定していた研究者は、世界で数人しかいなかったと思います。先生自身が開発された貴重な測定システムでしたが、気前よく4年生の私にも使わせて頂いたのを覚えております。卒業研究では正弦波パターンの刺激に対する循環動態の振舞いを見るのが楽しくて仕方ありませんでした。この研究は日本生理人類学会誌2巻2号に掲載されました。今読み返すととても懐かしく感じます。

下半身陰圧を正弦波パターンに制御するのはとても難儀でした。陰圧負荷を電子制御で一定に保つだけでも大変で、正弦波パターンに変化させるのは無理ではないかと諦めかけたこともあります。ノイズが混じったスペクトルを示すような歪んだ正弦波ではHRVの同時解析ができなため、時間ばかりが余計にかかってしまいました。しかしながら、その甲斐もあって、調べた限りでは、周期的な下半身陰圧負荷時にHRVを同時解析した初めての研究例となりました。このような測定装置ですが、当初から形になるのか五里霧中だったにもかかわらず、また途中で千葉大学へ転出したのにもかかわらず、安河内先生には開発費用も含めてずっとサポートして頂きました。感謝のあまり言葉もございません。

岩永光一先生（千葉大学）には、研究室のスコープとは必ずしも合致していなかったテーマに

もかわらず、研究の継続を見守って下さり、その上、毎日のお昼休みには支離滅裂な研究の話にもいつも付き合ってくださいました。大変感謝申し上げます。おかげさまで論文としてまとめることができました。

#### 奨励賞（英文誌）受賞のことば

西村貴孝（長崎大学医学部）

この度は栄えある賞を賜り、厚く御礼申し上げます。この賞を励みに、慢心することなくさらに研究活動に精進致します。

今回、賞を頂いた論文は私の博士論文の中核となるデータをまとめたものです。現生人類がアフリカを出発した後、氷河期を迎えた地球は寒冷化し、我々の祖先は過酷な寒冷環境を遺伝的、生理的、文化的に適応することで生き抜いてきました。そして現代人の生理機能、特に耐寒性にもその適応が影響を与えていると考えられますが、遺伝要因という点はあまり明らかにされていませんでした。そこで本論文ではミトコンドリアの遺伝子を切り口に、現代人の耐寒性の遺伝要因を探りました。ミトコンドリアは母系遺伝で組み替えが起こらないため、祖先の移動を大まかに知ることができる手段とされます。本論文ではミトコンドリアの遺伝子タイプで分けた2つのグループを、夏期と冬期に比較的強い寒冷曝露実験を行いました。その結果、夏期では寒冷適応的と考えられるグループは深部体温の低下が小さく、寒さに強いことを示しましたが、冬期ではグループ間に差が見られませんでした。これは遺伝的な耐寒性の差が夏期では顕著になるが、冬期では季節性寒冷順応によってその差が小さくなることを示しました。つまりヒトは環境の変化に伴い遺伝要因を補うことが出来る適応力を持っていると考えられます。今後は単一の遺伝子だけでなく、より多くの遺伝子多型や、震え産熱ではない非震え産熱の個体差などを検討し、現代人の寒冷適応能を解明し、その成果の実社会への還元を目指したいと思います。

最後になりましたが、学部時代から一貫してご指導いただいた綿貫茂喜教授（九州大学）、論文の執筆にあたり多くのアドバイスを頂きました。安河内朗教授（九州大学）、共同研究者の先生方や関係者に改めて御礼申し上げます。私事ではありますが、平成25年3月に学位を取得し、8月

より長崎大学医学部公衆衛生学教室に助教として赴任致しました。未だ若輩の故、皆様の御指導、御鞭撻を今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。

#### 奨励賞（英文誌）受賞のことば

Titus Wijayanto（九州大学）

この度は、我々の論文「Effects of duration of stay in temperate area on thermoregulatory responses to passive heat exposure in tropical southeast Asian males residing in Japan」が平成23年度日本生理人類学会奨励賞を賜りました。大変名誉なことであり、心から感謝を申し上げます。このような素晴らしい賞を頂けるのは夢にも思わず、驚くとともに身の引き締まる思いです。

本研究のご指導を頂いた九州大学大学院芸術工学研究院の柝原裕先生、共同執筆者である千葉工業大学の若林斉先生、共に実験に取り組んだ研究室のメンバーへ感謝を申し上げます。また、実験及び解析に関わった全ての方々に御礼申し上げます。

この論文では、日本に滞在していた東南アジア人の男性の暑熱環境への脱馴化のメカニズムを明らかにすることを目的としました。その結果、東南アジア人は滞在期間が長くなるほど、発汗するまでの時間が早くなり、総発汗量が大きくなり、暑熱暴露の発汗反応の脱馴化が起こったことが分かりました。

まだ研究者として至らない部分があると思いますが、今後より一層研究に励んでいきたいと思っております。

#### 奨励賞（和文誌）受賞のことば

崔多美（九州大学）

この度は奨励賞をいただき、大変光栄に思います。本論文の執筆にあたってご指導を頂いた綿貫茂喜先生に深く感謝致します。そして九州大学の生理人類学講座、ユーザー感性学専攻の先生方からご助言を頂きました。心から感謝致します。

本論文「社会的要素を含む快情動画像がストレス後の生理的回復反応に及ぼす影響」は、家族愛や母性愛などを描写する画像を見ることによりストレスからの回復が生じるということを実験的に検証したものです。したがって、ヒトは非常に社会的動物であることを、この研究を通じて

改めて確認できたと思います。

この研究に基づき、現在は共感に焦点を合わせ、他人に共感しやすい人とそうではない人との間にどのような脳活動の違いがあるかを研究しています。共感ヒトの社会的相互作用において必須的能力であり、その個人差の生理学的究明はヒトという存在を理解できるキーになると思います。今後の研究を通じて、生理人類学の発展に貢献したいと思います。

### ベストレビューアール賞を受賞して

高崎裕治（秋田大学）

学会誌 JPA に創設された Best reviewer award をいただき、ありがとうございます。PANews へ寄稿するようにとのことで、以下に雑感を記します。

学会誌もオープン・アクセス・ジャーナルとなり、実際に雑誌を手にとってみることもなくなりましたが、これも時代の趨勢というものなのでしょう。投稿原稿のレビューもネット上で海外の編集者や著者とやりとりする時代となりました。

しかし、レビューの仕方は今も昔も変わっていません。編集チームからのレビューの依頼とともに示される評価のガイドラインは以下のようになっています。

1. When assessing the work, please consider the following points:
2. Is the question posed by the authors new and well defined?
3. Are the methods appropriate and well described, and are sufficient details provided to replicate the work?
4. Are the data sound and well controlled?
5. Does the manuscript adhere to the relevant standards for reporting and data deposition?
6. Are the discussion and conclusions well balanced and adequately supported by the data?
7. Do the title and abstract accurately convey what has been found?
8. Is the writing acceptable?

いずれも語り継がれていることですが、投稿する側が原稿を見直すときのポイントでもあります。

これに付け加えるならば、原稿が生理人類学を意識したものになっているかということも大切な視点ではないでしょうか。生理学や体育学など多くの隣接科学の雑誌にも掲載されているよう

な論文には見られない、特色となる人類学的視点が必要なように思います。JPA がインパクトファクターを得る学会誌となる上でも欠かせない要素であったと聞いています。

レビューを依頼されて忙しいときは気が進まないこともありますが、その反面、引き受けると大変勉強になります。自分が知らない研究手法やデータ分析の仕方に出会うこともあり、ネットで検索したりすることがあります。また、再査読の段階になると、他のレビューアールのコメントが情報提供されます。特に、その分野では著名なのであろうと思しき人物のコメントを見ると、造詣の深さを感じ入ったりすることがあります。

その昔は、研究方法を読んだときに「倫理委員会の承認・・・」という件の記述の有無についてはあまり気にしていませんでしたが、最近は気になるようになりました。先輩から呼び止められて、インフォームド・コンセントもなく、いつの間にか被験者にとり構図はもはや存在しません。血清脂質など血液性状を調べる通常の採血にも倫理委員会が採血の健康影響について配慮するよう条件付きで承認するという厳格な？大学もあります。一方、レビューアールに対しては審査している論文について利益相反の有無を申告させるようになりました。いずれもご時世なのでしょう。

時代の波に翻弄されながら、これからはレビューの量ではなく質の向上に努めてまいりたいと思います。

### 「Best Reviewer Award 2012」を受賞して

大上安奈（東洋大学食環境科学部）

この度は「Best Reviewer Award 2012」という栄誉を賜り、誠にありがとうございます。このような素晴らしい賞を頂き、大変光栄に感じるとともに、身の引き締まる思いです。そして、この賞は今年から新しく始まったものでもあるということで、第1回目に受賞できましたこと、とてもうれしく思います。

受賞の連絡を頂いた際、まず「どうして私が？人違いでは？」と非常に驚きました。他の先生方と比べても、私の査読数は多くはなく、稚拙なコメントしか返答できていないと感じていたからです。しかし、「比較的早く査読を引き受ける返事をする」、「査読の期限内にコメントを返す」ということが選考基準に含まれているということ

を伺い、少しだけ納得することができました。と  
いいのですが、期限内のコメント返却は私が査読  
をお引き受けする際に気をつけていることの  
一つだったためです。その他に、査読をお引き受け  
する際に心がけていることとして、論理的にかつ  
正しい言葉(表現)でコメントをする、ということ  
です。上手く意図が伝わらないとちぐはぐなやり  
取りになってしまうため、こちらの意思を論文の  
筆者に適切に伝えたいからです。後者については、  
実行できているかは不安なところではありますが、  
徐々にでもよいコメントができるように努力  
していきたいと考えております。

「こういう表現があるのか!」「私ならこのよ  
うに書くけれど…」などと考えながら査読を行っ  
ています。査読は私にとって非常に難しく時間を  
要する作業ですが、その反面、得られるものも大  
きく、とても勉強になります。また、査読を行う  
ためには、自分自身が常に研究を続け、論文を書  
かなければならないと考えております。そのため  
にも、今回の受賞を励みにさらに研究活動に精進  
してまいりますので、ご指導・ご鞭撻のほどよろ  
しくお願い申し上げます。

最後になりましたが、Journal of Physiological  
Anthropology の益々のご発展を祈願して、お礼の  
言葉とさせていただきます。ありがとうございます。

#### 【学会動静】

##### ・大会予定

第 69 回大会 [会期] 2013/10/26-27  
[会場] 同志社大学(京都府)

第 70 回大会 [会期] 2014 年春  
[会場] 九州大学(福岡県)  
第 71 回大会 [会期] 2014 年秋  
[会場] 神戸大学(兵庫県)

#### from Editors

次号No.4の原稿締切は2013年10月31日です

▽今号からは、安陪(九州産業大学)と小崎(九州  
大学)で編集を担当致しました。今号は第 68 回  
金沢大会での学会各賞の授与を受けて、受賞者  
のお言葉を中心に掲載しました。次号は JPA 誌の  
インパクトファクター値に関する情報を掲載す  
る予定です。

・今季より本学会の理事に拝命いたしました小崎智  
照です。最初の任務として会報担当を仰せつかり  
ました。PANews は本学会の機関紙ではありません  
が、和文誌や英文誌とは異なる性質をもつ学会情  
報誌であります。学会員の皆様に有用な情報を少  
しでも多く発信できるように努力しておく所存  
でございますので、ご鞭撻のほど、よろしく願  
い申し上げます。

#### ▽PANews 編集事務局

安陪大治郎 九州産業大学 健康・スポーツ科学センター  
小崎 智照 九州大学 芸術工学研究院  
メールアドレス panews@jspa.net  
cc. abed@ip.kyusan-u.ac.jp  
cc. kozaki@design.kyushu-u.ac.jp

※お問い合わせなどは、上記のメールアドレスに加  
え、編集委員のメールアドレスを cc.に付けてお  
送り願います